

平成27年度活動報告書(1/4)

学部・委員会名 大学院生物産業学研究科

学部長・委員長等氏名 中川純一

担当大学院生物産業学研究科所管 学生教務課

テーマ 大学院生定員の充足

1. 目標（改善点や実施の背景となる事由、達成したい目標など）
定員確保について、修士課程は充足しているが、27年度博士後期課程においてはまだ充足していない。博士後期をせめて定員の2/3程度にまず上げていきたい。
2. 実施計画（具体的な方法・手段とスケジュールなど）
修士課程募集の段階で奨学金返済猶予などの説明を活発に行い、同時に教員にもその意識ももって指導することを実施してもらう。若手教員および、卒業生の博士号取得者を招いて、博士号取得後のキャリアの展開について紹介してもらう試みを計画している。大学院研究発表会は現時点でも学部生へのアピールは有効であるので、引き続き活性化していく。秋入学、外国からの入学希望者に対して、受け入れ体制と広報を整備・強化する。このためのHPや募集案内の整備などを行っていく。また社会人入学も実績を作っていく。
3. 達成度を判断するための指標
定員100%充足の場合を5とする。
4. 成果・評価
<p>■成果 4： 28年度入学者 修士課程：生産5、アクア3、食香6、産経5（計算19/20）、博士後期 1/8である。修士課程は定員をほぼ満たしており、社会人2、外国人1、生産外国人1である。博士後期は「学びて後奨学金」の適用にもかかわらず、入学希望者が少なかった。補足すると、27年度秋入学で大学推薦国費留学生在が1人入学している。</p> <p>■評価（5～1で記載してください）修士はほぼOKであるが、博士は満足とは言えない。ただ、この現象は日本全国で起きていて、国立大学（帝大系）ですら起きていることであり、社会に卒業後の受け皿が整備されていないことにも大きな要因があるとみられる。評価は3とするが抜本的な博士後期定員充足対策はハードルが高いものとみられる。</p>
5. 課題及び改善事項
修士課程については、学部の早い時期から、育てること、またポスター発表会に学部生を参加させることの効果はでてきている。しかし博士後期課程については、自己点検委員会の指摘はあったものの抜本的対策は難しい。「学びて後奨学金」の効果に期待すると同時に、この広報を学部生のうちからしておくことなどができうことだと考えている。
6. 平成28年度への継続の有無
有

※添付資料がある場合は、資料名、資料番号を記載すること。

添付資料：

(1) 平成28年4月入学予定者リスト（奨学金適用内容）

(2) 大学院紹介

平成27年度活動報告書（2/4）

学部・委員会名 大学院生物産業学研究科

学部長・委員長等氏名 中川純一

担当所管 学生教務課

テーマ 大学院就職活動の向上

1. 目標（改善点や実施の背景となる事由、達成したい目標など）
博士後期学生の就職率が低い。キャリアセミナーへの後期学生の積極的参加を教員からも促してもらう。キャリア活動への意識づけを若手教員の博士号取得以降のライフステージ情報などにより、行っていく。
2. 実施計画（具体的な方法・手段とスケジュールなど）
昨年度一定の成果のあった、大学院特化キャリアセミナーを引き続き実施、参加者を確保する。インターンシップについても可能な限り受け入れ先を確保する。26年度に参加者のなかった国際インターンシップについても広報を強化する。
3. 達成度を判断するための指標
博士前期75%、博士後期40%正規就職。
4. 成果・評価
<p>■成果 博士前期90%、博士後期50%（正社員1、僧侶1、ポスドク2）</p> <p>■評価（5～1で記載してください）5 5 方針に基づいた活動ができ、目標に対する達成度がきわめて高い</p>
5. 課題及び改善事項
6. 平成28年度への継続の有無
<p>無 目的が達成できた。支援活動自体は続けるが特別な課題とはしない。</p>

※添付資料がある場合は、資料名、資料番号を記載すること。

平成27年度活動報告書（3/4）

学部・委員会名 大学院生物産業学研究科

学部長・委員長等氏名 中 川 純 一

担当所管 学生教務課

テーマ 国際化、国際感覚の向上

1. 目標（改善点や実施の背景となる事由、達成したい目標など）
英語での発表、討論の機会を増やし、海外からの大学院への入学もアピールしていく。海外からの研究者の講演も歓迎したい。
2. 実施計画（具体的な方法・手段とスケジュールなど）
大学院中間発表会のポスター展示では全員に英文要旨を掲示させる。前回は画面下であったが、今年度は画面上とする。秋入学を含めて、募集要項自体を国際化対応のものに変えていく。英文ホームページの研究テーマ紹介、院生活動紹介を充実させていく。
3. 達成度を判断するための指標
大学院中間発表会での全員の英文要旨上面掲示。海外対応募集要項の作成と公示。英文HPのデザイン案を作成する。
4. 成果・評価
<p>■成果 （1）秋入学国費留学生を受け入れた。ポスター展示で英文要旨を画面上に展示させた。成果は修士論文英文要旨の質の向上として表れた。ホームページ掲載を目的としたe-book案をまず日本語で作成した。次年度はこれを英訳して、HPに掲載させた。資料 e-book pdf</p> <p>■評価（5～1で記載してください）</p> <p>5 方針に基づいた活動ができ、目標に対する達成度がきわめて高い</p>
5. 課題及び改善事項
e-bookの英訳について、国際センターを通して行い、それを大学院HPに掲載することが、残された課題である。ただ、受け入れ体制が整っているとも言い難く、例えば学生寮がないなど、根本的問題は残っている。
6. 平成28年度への継続の有無
有

※添付資料がある場合は、資料名、資料番号を記載すること。

平成27年度活動報告書（4/4）

学部・委員会名 大学院生物産業学研究科

学部長・委員長等氏名 中 川 純 一

担当所管 学生教務課

テーマ ディプロマ・ポリシーの具現化

1. 目標（改善点や実施の背景となる事由、達成したい目標など）
高度な技術と学問レベルを涵養し、各専攻の専門分野を柱としながら、問題設定と解決能力を備え、生物産業全体を見渡せる実行力とリーダーシップを持った人材の育成を目標とする。この目標にそったカリキュラムの改善点を絞り込んで、改善策を大学院FD委員会で練っていく。
2. 実施計画（具体的な方法・手段とスケジュールなど）
授業評価、研究指導評価、教員による授業実施記録をFD委員会で精査して、これらとディプロマ・ポリシー具現化における乖離点をあぶり出す。その上でカリキュラムの改善策を考える。
3. 達成度を判断するための指標
改善点の明確化と、それに対する改善案の作成。
4. 成果・評価
<p>■成果 授業評価、及び、授業実施記録、研究指導評価を回収し、これを委員会で配布し、問題点などを論じた。この件は定着した。一方カリキュラムの向上についての論議が進まなかった。</p> <p>■評価（5～1で記載してください） 3 方針に基づいた活動ができた</p>
5. 課題及び改善事項
カリキュラムへの議論が進んでいないので、28年度は3その点について特化して進めていく。
6. 平成28年度への継続の有無
有

※添付資料がある場合は、資料名、資料番号を記載すること。